

研究のさらなる発展を希って

辻 功
(日本生涯教育学会顧問)

1

学会創立 20 周年や 21 世紀の幕開けが秒読みの段階に入ったことなどから、最近、本学会の会員の中に「原点に戻って研究活動を考えよう」とか、「初心を忘れず、より充実した研究を」といった類の論が目につく。そうした論がなされる背景に研究の停滞やマンネリ化に対する危機意識もあるように思える。「学会だより第 77 号」(2000.2.10) に、池田秀男副会長が「第 20 回大会を振り返って」という論文を寄せておられる。その中で、同氏は「全体としては既に終わったものや実践したものの分析報告や説明が本学会活動の大勢となっており、新しいものを切り開く研究は劣勢だといってよかろう」と述べ、厳しい評価を下しているのもその一つの証左であろう。私は最近足を痛め今回の研究大会を欠席したので、池田氏の評価が当を得たものかどうかを判断することはできない。

ただ、本学会の一会員として「学会はこうした研究をすべきではないか」と日頃私なりに思っていることはある。しかし、その領域の研究は、実は私の苦手とするところで、私自身これまで全くやってこなかったもので、これについて発言する資格はないと考えていた。従ってその事に触れることは今までなかったのであるが、心中では常にどうしたものかと思案していたことも事実である。

幸にも今回、年報編集委員会から、執筆の機会を与えられ、しかも「日頃の考えや生涯学習研究への提言、学会への注文など自由に」書いてよいとお許しをいただいたので、自分自身のこれまでの言動を一切棚上げさせてもらって、勝手な希望を述べてみたい。

2

およそ、学会はどのような研究を手がけるべきであろうか。もちろん、会員ひとりひとりが個人的に問題を感じたり、興味・関心を寄せる事柄を自由に研究することが学会の全研究活動の大半を占めることは当然である。しかし、一方で学会としてやらなければならない研究はいくつかあるように思う。それを会員の自主的、自由な研究活動の中に期待するか、それとも何らの組織を作って計画的に遂行するかは別として。

私は学会が行なわなければならない研究は大きく分けると2つあると考える。1つは基礎研究であり、他の1つは先端研究である。

本学会は創立当初から、中央・地方の行政職員や民間企業の人、一般市民など多くの人と連携・協力して研究活動や推進活動を行い、数々の成果をあげてきた。しかし、基礎研究や先端研究までそれらの方に依拠するのは、酷というものであろう。というのは基礎研究や先端研究はいつ終るとも知れない、地味な、しかも面倒は作業を伴うことが多いからである。行政職員にせよ、企業の担当者にせよ、それらの方は実践活動にも重い責任をもち、組織上の、あるいは時間上の、その他様々な制約をうけているのが普通である。従って、基礎研究や先端研究だけは、研究を主要な業務とする会員に頑張ってもらいたいと思う。

3

さて、第一の基礎研究であるが、具体的にいえば、例えば鍵となる諸概念を明確にする研究がある。本学会にとって最も重要である「生涯学習」という言葉すら実はまだ本当に明確化されていないと思うのは私だけであろうか。生涯学習とは「生涯にわたる学習をいう」とか、「人々が生涯にわたって知識、技術、態度を開発する全過程である」とか、「学習者が自分は生涯学習をしていると自覚していれば生涯学習といえる」とか、「ともかく、学習さえしていれば生涯学習である」とか、いろいろの方が様々な定義づけを試みてきてはいるが、どれも「明確化」にはほど遠い概念規定のように思われる。会員の中には「何をいまさら概念の明確化などという生産性のない不毛の研究をむし返すのか」と非難される人があるかもしれない。しかし、この概念の曖昧さのために、日々の職務や活動に疑問をもったり、悩んだり、不安を

募らせたり、自信を失っている行政職員やボランティアや一般市民が結構いるのである。

加齢は確実に体力を衰退させる。壮年期には容易であったある学習も、老年期には苦痛となって時々中断し、遂には放棄することもある。この場合、壮年期の学習は生涯学習なのだろうか。興味・関心がころころと変る人もいる。昨日まで、ある学習をしていた人が、今日は全く別のことを学習している。この場合、どちらの学習が生涯学習なのだろうか、いや両方とも生涯学習なのか、それとも両方とも生涯学習ではないのか。幼児期の学習、児童期の学習、青少年期の学習、壮年期の学習、老年期の学習を総称する言葉が生涯学習なのだろうか。20世紀後半以降の人々の学習をすべて生涯学習というのであろうか。

確固とした定義を学会が発表するなら、精神的な安定を多くの人に与えることができると考える。

研究の守備範囲の明確化も基礎研究の1つであろう。たしかに、現在、多くの学問は過去の守備範囲を超えた研究をどんどん行うことによって、新しい研究領域をきり拓いたり、輝かしい成果をあげている、従って、いたずらに旧い守備範囲にこだわってそれを逸脱した研究を異端視する言動は厳に慎まなければならない。しかし、何を研究しても、生涯学習の研究であるとするのいがかかと思う。率直に言って、この安易な、(よくいえば鷹揚な)態度や雰囲気、これまでかなり学会にあったように思われる。前述したような理由もあり、研究範囲を決めることは非常に難しいのであるが、学会の基礎研究の1つとして、絶えずこの問題を議論していく必要があるのではなかろうか。

4

第二の「新しいものを切り開く」先端研究を会員にやっていただきたい理由は説明する必要はない。

ところで、先端的研究にはもちろん様々なものがあり、私の思惟が及ばないものもあるので具体的に列挙することはできないが、今すぐ思いつくのはニューメディアと生涯学習のかかわりの研究であろう。ニューメディアの技術的進歩、社会への浸透の速さには目を見張るものがある。両者のかかわり

の研究を先端研究といっても何人も異議をさしはさまないであろう。年報第20号で清原慶子氏が「生涯学習研究の課題を問う」という学会の問いに答えて「情報化の進展と生涯学習の方法に関する研究の課題と展望」を発表し、この論をさらに発展する狙いで本年報第21号の特集を「情報化の進展と生涯学習」としたのは首肯できる。

ただ、これまでのニューメディアに関する研究は、ともすれば、メディアがいかに優れた（学習上の）機能を数々具備しているかという説明や、メディアの普及や設置に関する統計資料の紹介や、中央・地方の政策の立案状況・実施経過の解説などに終始し、肝心の利用者や学習者の顔が全くみえないものが多かった。これからの学会のニューメディア関連の研究には学習者の視点に立って、どうメディアが活用されているのか、実際いかに学習成果があがっているのかを実証するものを期待したい。

先端研究には、前述したように様々な種類・領域があるのであって、何も情報革新にかゝわるものだけではない。明らかに悪化し続ける社会環境の中で、頻発する深刻な教育問題にどのように立ち向い、改善していくのか、その方策を探し求めるのも本学会に課せられている一つの先端研究であると思う。本学会はこれまでどちらかというと恵まれた人達の学習活動の解析や援助活動の仕組みの考案に大部分のエネルギーを割いてきた。しかし、そうした研究ばかりに安住していられない環境の激変がおし寄せてきている。つまり、私達ひとりひとりに危機管理のセンスと能力が要求される時代になってきているのである。